

## 特別研修

### 月例研究会 議事録 ( 6 月 )

2010 年度第 2 回

報告題名 明治後期三陸汽船会社の「荷主組合」と共同性	
報告者 佐藤文吉 (所属分野) フィールド社会技術学	日時 6月24日 午後3時～ 場所 第2講義室
座長 水木	議事録担当者 宮里
<b>出席者</b> 長谷部、木谷、安江、両角、米倉、冬木、伊藤、石井、菅井、水澤、佐藤(文)、韓、大友、スチン、八木、宮本、神浦、佐々木(龍)、福田、水木、宮里、渡邊、山口、林、王、北村、堀、滝田、威、易、中村、泉井、金、覃、小原、片山、佐々木(彩)、佐藤(良)、澤田、渋谷、千葉、藤	
<b>報告要旨</b> 報告者は、明治後期から昭和の戦前期にかけて三陸沿岸地方の近代化に重要な役割を果たした、内航海運・三陸汽船株式会社(以下、三陸汽船)の設立、運営、変化の過程を、1.主体、2.行政、3.地域経済に留意しながら、歴史的、具体的に分析・検討することを目的に研究を進めている。この海運会社は、地方商人らを中心に三陸沿岸住民が地域経済発展のために零細な資本を糾合して設立したものであるが、明治期の包括的な検討はすでに『農業経済研究報告』第40号でおこなった。 今回は、共同計算営業の協定過程において各地域で結成が相次いだ、三陸汽船を専属的に利用する「荷主組合」について検討する。ヒトとヒトの「精神的結合」によって設立された三陸汽船でなぜこのような戦略を必要としたのかを課題とし、比較可能な「荷主組合」を取り上げ、規約等を分析することによって要因を抽出し、その理由を明らかにする。	

## 質疑・応答

八木：佐藤さんは「歴史から学ぶ必要がある」ということを言っていたが、地域に関してどういった歴史から学ぶのか。

佐藤：私のイメージの根底にあるものは「農協」である。今の農協は完全に企業化されている。長い間、農協のあるべき姿とか、様々な研究がなされているのに全然変化しない。社会環境の変化に伴い、その意味をもう一度考え直す必要がある。私が考える「農協」は、明治に基礎があると思う。例えば、産業組合が出来たときの歴史に注目することで、日本本来のやり方があったり、地域によっては組合をつくる時に積極的に取り組んだ地域もあった。そのような経緯や、概念を今までちゃんと議論されてこなかったことに問題がある。

八木：農協であっても、企業化ということは経済合理性の追求であり、ある意味、世界の変化に対応しているということだと思うが。

佐藤：もちろんそうである。経済合理性がなければ企業として成立できない

八木：そうすると、日本本来のやり方があるという意味はわかるが、この研究で何が問題点なのかわからない。

佐藤：それは、今まで概念規定が議論されてこなかったことに問題がある。そういう点において、日本の主体性が問われていると思う。

八木：佐藤さんの考えている「日本の主体性」とはどのようなものか。

佐藤：日本には、歴史的な流れがある。それによって培われた日本固有の精神文化がある。日本古来の文化なり、培ってきた歴史を振り返って議論し、それらを概念に組み込んでいかなければならない。

伊藤：今回の報告で、共同性、経済合理性等について、たとえば経済合理性の話がされる場合、株主の共同性がどのように崩れていったのか、配当の変化、株数の調整など数値としてのデータが見られなかったが、具体的なデータはないのか。

佐藤：その分析は草稿に詳しく載せている。

伊藤：プレゼンをされる場合、図や表を加工して、佐藤さんなりの仮説を立て、数値を使って、それらを表現されたほうが分かりやすい。

長谷部：聞く限りこの報告は全く整理されていない。プレゼンテーション以前の問題。ただ調べてもらいたいのは、荷主組合の傘下に入っている組合、荷主組合に入らなかった組合などの全体の関係図、見取図を付けてほしい。また、数値を使って裏づけをされた上で、佐藤さんの考えを明確にしてほしい。でなければ議論しようがない。

米倉：荷主組合と同業者組合が当研究の大きなエレメントになっていると取れる。こういう捉え方は佐藤さんが考えた独自のものか、それとも先行研究があるのか。例えば、瀬戸内海海運はもっと激戦があったと思う。そのへんの先行研究との関係など紹介してもらいたい。

佐藤：先行研究に関して、ご承知のように、三菱会社と共同運輸会社の熾烈な戦いに関する研究はある。しかし、これらは初期段階に関する研究や、海外航路や内航汽船との戦いの研究であり、今まで地域に関する研究はされてこなかった。

ただし、明治40年代になると鉄道網が整備された。鉄道の遅れた三陸沿岸におけるこのような海運の研究はいままでない

米倉：荷主組合や同業者組合は地域のプレーヤーとして、他の地域ではどうだったのか。

佐藤：どの地域も荷主組合というような固有名詞を使っていない。しかし、阿波国において「藍の商人」が地域のプレーヤーとして荷主組合のような組合を作っていたという事実はある。私も迷った。これを荷主組合と呼んでいいものかどうか。ただ、適当な表現がなく、同業組合との差別化を図るために荷主組合というものを使った。このような意味での荷主組合としての先行研究はない。

米倉：佐藤さんのオリジナリティーはその辺にあるのではないか。もっとその辺を整理してみたらどうか。中途半端な関わり方、焦点の絞り方で、全体としての整理が足りないし、先行研究との関係もみえない。なおかつ、対象となっている地域の変化をもたらすようなエレメントに果たしてなったのかどうか、独自の視点を明確にして、先行研究との関わりの中で進められたらどうか。これはコメントです。